

安森石灰窯跡

山中に残されたレンガ積みの石灰窯跡。この周囲には作業場倉庫や寄宿舍があったとされている



夏になると、涼を求めて、またそうめん流しを味わいに、大勢の観光客で賑わう安森洞。その約1^{キロ}手前にひっそりとたたずむレンガ積みの窯があることを知っていますか。

一人の事業家の手によって

大正から昭和25年頃にかけて、町内で唯一の石灰窯

として、肥料やセメントなど需要の高い石灰が生産されていたという安森石灰窯。事業家の松本六工門の手によって始められたこの事業は、当時の人々の生活を支えていました。

村道の開設にも尽力したと言われている松本氏は、大正12年、安森口まで開通した村道の傍に、まずは2基の石灰窯を製作。その後、昭和9年に村道が延長されると、現在窯跡が残る場所へと窯場が移設されました。そして、工場長となった松本氏とその家族は、石灰の本場である西予市高山から技術者と呼ばれ、さらにこの事業は盛り上がりを見せたと言います。

御在所山の中腹から採石され、運び出された石灰石。砕石した後、窯の中で燃やされた石灰石は、水をかけると粉々になったと言います。その後、馬車や木炭車に乗せられて運ばれていきました。

衰退の一途へ…

地元の人も多く携わっていたとされる本事業。戦後の肥料難の時代には最盛期を迎え、戦後の復興を支えました。

しかし、その後、経済が落ち着くにつれて、相反するかのようには活力を失って

いった石灰窯。地域の人々にとって生活の糧であったこの産業は、ついに昭和25年、その歴史に静かに幕を閉じました。

かつての産業の功績を残すレンガ積みの窯跡。現在は、この地を訪れた観光客らが、その姿に足を止め、当時の生活に思いを馳せています。



案内人

岡本 知幸さん

おかもと ともゆき
= 小松 =

安森洞保存会会長。「地域のために」とさまざまな地域活動に貢献。夏には、鍾乳洞からの湧水の冷たさと薬味が売りの安森洞そうめん流しで、観光客をもてなしている。また、この地に築かれたさまざまな歴史・史話を、訪れた人たちに説明することもあるという。